Ⅰ　学校の概要

アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業　**観音寺市立大野原中学校**

◆生徒数及び教員数

〇生徒数

第１学年	第２学年	第３学年	特別支援	全　校
３学級 ９７名	４学級 １１０名	３学級 ９９名	２学級 ７名	１２学級 ３１３名

〇教員数　２６　名

◆学校の特色

本校は「生きる力を身に付け、夢に向かってチャレンジする生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、「夢をもち挑戦する生徒」「自ら考え行動する生徒」「他を思い協力する生徒」の育成を目指してきた。その結果、健康・体力づくりの視点では一定の成果が得られたが、確かな学力づくりの視点では、県学習状況調査や全国学力・学習状況調査等の結果を見ると、基礎学力の定着、学習意欲の高揚、学習習慣の確立などの面で課題が残されている。また、豊かな人間づくりの視点でも基本的生活習慣の定着、よりよい人間関係の構築などの面で十分とは言えない。

そこで、昨年度【確かな学力プロジェクト】として、学習規律の徹底、アクティブ・ラーニングを取り入れた学習活動、基礎・基本の定着を中心に取り組んできた。また、【仲間づくりプロジェクト】では、学級活動、道徳教育、学校行事や総合的な学習との関連、人権・同和教育の充実、自尊感情の調査などを通して、仲間づくりや自尊感情の向上に力を入れてきた。

Ⅱ　研究主題等

研究主題

一人ひとりが大切にされる温かい集団づくり

－　全員参加の授業づくりを目指して　－

◆研究主題設定の理由

本校の生徒は、与えられた学習課題に落ち着いて取り組み、「できるようになりたい」という気持ちをもっている生徒が多い。しかし、学力差が大きく、意欲的に授業に参加する生徒がいる反面、すぐにあきらめ、学習に対して受け身の生徒も見られる。また、他との関わり合いがうまくできない生徒や自分の考えに自信が持てずそれを表現することに対して苦手意識を持つ生徒も見られる。これらのことから、全員参加の授業づくりを目指すことが、生徒一人ひとりの学力を伸長させるとともに、支え合い、お互いを大切にする集団づくりになると考えた。

◆研究内容及び方法

１　研究仮説の設定

「問題解決的な学習」や「学び合いの場」を適切に設定することにより「主体的・対話的で深い学び」を実現させ、それらを通して「優しく、思いやりのある（愛情）」「自分らしくいられる（信頼）」「互いに高め合える（共働）」温かい集団づくりが行えるであろう。

２　研究内容

⑴「大中学びのスタンダード」の浸透、定着を図る

○　授業規律をはっきり示す。「大中生六つの約束：授業編」「大中声のものさし」

○　聞き合う活動を取り入れる。

⑵プロジェクト１【問題解決的な学習】の設定

○　①問題を認識（生徒自身の課題とさせるような工夫をする）、②予想、③情報の収集・分析、④課題解決というプロセスを踏襲する。

○　「教える場面」と「思考・判断・表現させる場面」を明確にし、関連させながら指導する。

⑶プロジェクト２【学び合いの場】の設定

○　「分からない」「できない」が言い出せる雰囲気をつくり、「分かる」「できる」に変えるため、ペアやグループで学び合いの場を設定する。

○　学び合いの設定の必然性についての評価を随時行い、学び合いが有効に活用されるようにする。

○　生徒の実態に即した構成的グループ・エンカウンターの手法を取り入れた学級活動や道徳の教材を開発し、資料の活用・蓄積をする。

⑷自尊感情を高める工夫

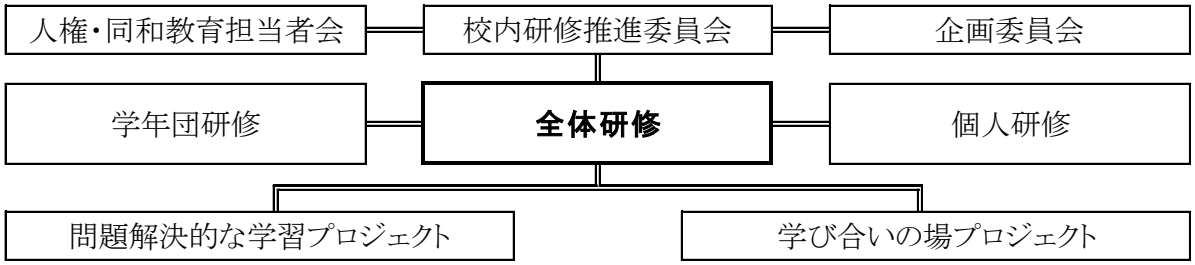
○　学校行事や総合的な学習を通して、自尊感情を高める体験活動を工夫し、実践する。また、特色を生かした勤労生産学習を見直し、振り返りカードを用いて自尊感情の向上を図る。

○　人権感覚を磨くために教職員研修を行い、人権・同和教育の充実を図る。

○　人権・同和教育をとおして仲間づくりの工夫を行い、自尊感情を高める工夫をする。

○　GOOD カードを活用して自尊感情の向上を図る。

３　研究の方法・組織



○　研究を進めるにあたっては、校長・教頭・現職教育主任・各学年校内研修担当１名で構成する校内研修推進委員会で、研究の方向付けや研究課題について協議し、全体の校内研修で提案・依頼を行う形で進めていく。人権・同和担当者会との連携も図る。

○　研究の視点として、①問題解決的な学習、②学び合いの場の２プロジェクトを設け、各教科や学年団の枠を超えた３～４人のグループでの授業研修や、それぞれが連携しながら研究実践、運営を進められるようにする。

○　年間３回の公開授業週間と、年１回の公開授業を教師全員が実施する。

○　校内研修時に、２プロジェクトでの話し合いを行い、研究の内容や方向性について検討、確認、報告し、共通理解を図る。

○　学年団会の時に、各部会から周知する時間を確保する。

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

１	（生徒質問紙）　大中生６つの約束（1. 学習準備、2. あいさつ、3. 返事、4. はっきり発表、5. 話をしっかり聞く、6. グー・ペタ・ピン）を守っていますか。

指標　「①守れている＋②どちらかといえば守れている」の合計

5月調査	→	目標値	→	11月調査
89.3%		90.0%		86.5%

１	（教師質問紙）　学習規律（大中生６つの約束）を維持していますか。

指標　「①している＋②どちらかといえばしている」の合計

5月調査	→	目標値	→	11月調査
82.4%		90.0%		94.1%

指標の達成に向けた実践

１　学習規律の徹底～大中学びのスタンダードの浸透、定着を図る

授業を成立させ、基礎的･基本的な学力を育成するために、まず、学習規律を確保する必要がある。問題解決的な学習の場を設定したり、学び合いの場を設定したりする場合も、この学習規律の徹底が必要条件と考えた。

そこで、「大中生６つの約束：授業編」、「大中声のものさし」を作成し、各教室の黒板上部に掲示し、常に意識しながら学習に取り組めるようにした。

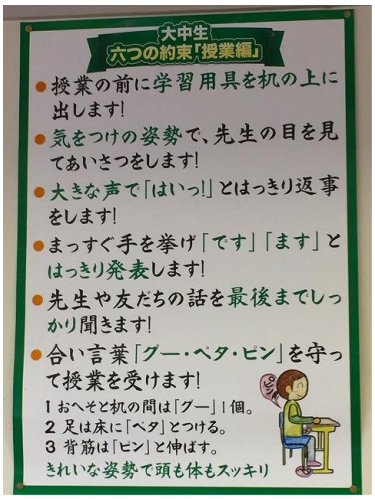
また、教師側の基本的な授業のスタイルなどを簡潔にまとめた「大中学びのスタンダード」を作成し、年度当初に教員全員に配布するとともに、月１回の校内研修の時間などに、これをもとにした研修を取り入れ、内容の浸透を図った。

大中学びのスタンダードには、次の事項を掲載している。

① 全員参加の授業の手立てとして
　○ 授業規律をはっきりと生徒に示す　○「課題」と「まとめ」の明確化
　○ 問題解決的な学習の導入　○ 学び合いの場の設定　○ 授業の評価

② 教師の授業時の役割として
　○「聴く」「つなぐ」「もどす」「ケアする」という働きを教師がすべきであること

③ その他のポイントとして
　○ 教師のポジションや「学び合い」の留意点　○ ものの生かし方



▲大中生６つの約束：授業編

▲大中声のものさし

２　（生徒質問紙）　学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標　「①取り組んでいる＋②どちらかといえば取り組んでいる」の合計

５月調査	目標値	11 月調査
80.6%	90.0%	83.1%

２　（教師質問紙）　普段の授業で、生徒の学び合う場を取り入れていますか。

指標　「①取り入れている＋②どちらかといえば取り入れている」の合計

５月調査	目標値	11 月調査
47.1%	70.0%	76.5%

指標の達成に向けた実践

２　問題解決的な学習の設定と学び合いの場の設定

①問題を認識、②予想、③情報の収集・分析、④課題解決というプロセスでの問題解決的な学習を可能な限り設定する。その際、特に課題設定の場面を重視し、できる限り**生徒自身の課題とさせるような工夫**をする。これにより、生徒自身の課題解決を図るための学習が展開されると考えた。

▲自分の課題を再設定する

生徒自身の課題とさせるような工夫としては、例えば、最初に単元を貫く課題を提示した後に、その授業における個人の課題を設定させたり、五感に訴える実物から課題を見つけさせたり、最初に提示した課題で実践(シミュレーション)した後に、個人の課題を再設定させたりするようにしてみた。

▲４人組での学び合い

また、学び合いの場の設定は、誰とでも分け隔てなく互いの話を聞き合う関係をつくることが、全員参加の授業には不可欠であり、それにより、すべての生徒の学びを保障するという考え方に基づいたものである。男女市松模様の座席配置で４人組をつくり、グループ単位の話し合いがしやすいように机の高さを合わせ、発表のための小ホワイトボードを常備した。そして、授業の中で互いに話を聞き合いながら学びを広げたり深めたりできるようにした。学び合いの場の設定に必然性を持たせるための工夫として、①**目的を明確にし、共有する**こと、②**ゴールをイメージ**させること、③自分たちで解いた**達成感**を味わわせること、を挙げて実践に取り組んだ。学び合いの必然性を感じさせる工夫の例として、**ワールドカフェ方式**で意見を出し合ったり、一人では解決できない課題の追求方法を**友だちと協議して**決めたり、課題に対する意見や考えを**書き残させて、次の活動に生かす**ようにさせたりした。

▲ワールドカフェ方式での意見交換

３　（生徒質問紙）　学級では安心して自分の意見が言えますか。

指標　「①言える＋②どちらかといえば言える」の合計

５月調査	→	目標値	→	11 月調査
81.2%		90.0%		83.5%

３　（生徒質問紙）　自分にはよいところがあると思いますか。

指標　「①思う＋②どちらかといえば思う」の合計

５月調査	→	目標値	→	11 月調査
71.2%		80.0%		74.7%

指標の達成に向けた実践

３　自尊感情を高める工夫

本校での「**勤労生産学習**」はスタートしてから 30 年余りになる。玉ねぎの収穫、田植え、菊作り、稲刈り、玉ねぎの苗の植え付けを周年で行ってきた。この活動では、働くことの実感や食べ物への感謝、地域の方々とのつながりを持たせたいという当初のねらいを継続させてきた。

また、生徒どうしの人間関係づくりの支援として、生徒の実態に合わせた基本スキルを学ぶ「**大中人権サプリ**」の実践も継続的に行ってきた。そして、互いに認め合う集団づくりとして「**なかまづくり集会**」を学期に１回実施してきた。この実践では、**集会のルールとして積極的な参加や意見をきちんと聞くこと、発表の仕方や発表者への賞賛を提示**した。

さらに、友だちの良さを見つめ、「ありがとう」があふれ、自他の成長が実感できるようにするための **GOOD カードの取り組み**、地域の行事や県教育文化祭での**合唱の披露**、各種**ボランティアへの参加**や行事を振り返り、各自の活躍を互いに認め合う**各種掲示物**などの、**自尊感情を高める**取り組みも行ってきた。

これらの取り組みにより、学び合いの場で積極的に周りに働きかけて教えたり、学んだことを他に伝えたりすることができるような「**自分には〇〇ができる**」という自信を持たせようとしてきた。

▲田植えをする生徒

▲大中人権サプリ：上手な仲間のさそい方

感謝の気持ちを伝える GOOD カード

▲地域の行事で合唱を披露

▲運動会での活躍を知らせる掲示物

▲各自の目標を掲示し、互いに励まし合う

Ⅳ　研究の成果と課題

１　研究の成果

アクティブ・ラーニングの考え方を取り入れた、問題解決的な学習を授業に取り入れ、学び合いの場を適切に設定することにより、次の５点の成果が見られた。

(1) 授業の中で友だちと話し合う活動や意見を出し合う活動が行われ、結果として考えを広げたり、深めたりできるようになってきている。

(2) 分からない問題があっても、見方や考え方を変えながら、あきらめずに取り組もうとする生徒の割合が増加してきている。（７８．５％【５月】→８４．５％【11 月】へ　6 ポイントアップ）

(3) 生徒にとって授業が楽しいと感じるようになってきている。これは、学級で安心して自分の意見が言えたり、自分にはよいところがあるとする割合の増加とも関連があると考えられ、授業の中で居心地の良さが向上しているといえる。（６６．０％【５月】→７６．９％【11 月】へ　10．9ポイントアップ）

(4) 教師も生徒の活動を保障するように考え方を変え（５２．８％【５月】→８８．２％【11 月】へ　35．4ポイントアップ）、多様な方法で生徒の思考を揺さぶるような授業の展開も見られてきている。

(5) 学校行事や学級活動、勤労生産学習や地域行事などへの参加により、生徒の自尊感情も徐々に高まってきている。（3．5ポイントアップ）

２　今後の課題

一方、次の点については今後の課題である。

(1) 授業の内容の理解度は、想定したような伸びが見られず、基礎的・基本的な学力の向上については、まだまだ不十分である。（６６．５％【５月】→５７．８％【11 月】へ、8．7ポイントダウン）

(2) 話し合いの基本は、聞き合いであることを徹底し、友だちの話や意見を最後まで聞ける姿勢を身につけさせる必要がある。（５９．７％【５月】→５９．３％【11 月】へ、0．3ポイントダウン）

(3) 教師も、生徒の多様な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や助言が自信を持ってできていると言えるようにする必要がある。（「どちらかといえばできている」を含めると７０．６％だが、できていると自信を持って言える教師がまだいない。）

(4) 学び合いを取り入れて、生徒の活動時間を確保すると、知識や技能の高い生徒が教える側に固定化されてしまう傾向がある。自力解決の時間を短くして疑問点をもって学び合わせたり、遅れがちな生徒が話し合いに参加できるような支援を工夫したりする必要がある。

３　今後の方向性

生徒が安心して楽しく授業に参加できる素地ができつつあるので、今後はそれをいかにして学力向上に結びつけていくかを研究していこうと考えている。例えば、

(1) 振り返りの場の設定を工夫し、楽しみながら実践できる方策を検討する。

(2) 授業自体に変化を持たせ、一人学びとペアやグループでの学習を適切に授業の中に取り入れる。

など、通り一遍の方法から脱却し、変化と刺激のある学習を構築しつつ、学力向上につなげられないか、具体的方策を検討したい。